尼崎脱線14年 誓いを胸に

救われた命 誰かのため

2019.4.25 日経(E)13

重傷越え作業療法士に

高齢者リハビリ支援

JR福知山線脱線事故から14年の歳月が流れた。25日、初めて事故現場で営まれた追悼慰霊式。慰霊施設の「祈りの杜（もり）」では多くの遺族や負傷者らが犠牲者を悼み、そっと手を合わせた。生き残った使命感を胸に、亡くなった人の分まで前向きに生きる被害者もいる。「今度は自分が支える側に」。発生時刻に追悼の警笛が響き渡る中、事故の再発防止への誓いを新たにした。（1面参照）

高齢者のリハビリを指導する作業療法士の中野さん（大阪府摂津市）

大学1年生の時、事故で重傷を負った中野皓介さん(32)は現在、作業療法士として、地域の高齢者らにリハビリ指導にあたり、災害時には避難所で被災者にも寄り添う。

4月中旬、大阪府摂津市の保健センター。集まった地域の高齢者に中野さんがリハビリ教室を開いていた。「できる範囲でいいですよ」。参加者の体力に応じて歩行運動などを補助しながら、笑顔で会話を交わす。少しずつ体が動かせるようになる姿を見ると、やりがいを感じるという。「救われた命を使って、誰かを支える人になりたい」。事故で生き残った中野さんが、たどり着いた答えでもある。

事故に遭ったのは、大学に入ったばかりの通学中だった。多くの人が犠牲になった2両目。「傾いたと思った瞬間、目の前が真っ暗になった」。折れ曲がった車両に下半身を挟まれ、救出されたが筋肉が壊死（えし）するクラッシュ症候群と診断された。医師の尽力もあり、40日間の入院をへて無事に回復。だが、亡くなった人々のニュースを見るにつけ、「他に助かるべき人がいたのでは」と自責の念に駆られた。

病室でふさぎ込んでいた時、救いになったのは看護師らの笑顔だった。「一緒に元気になろう」と声をかけられるうちに、「がんばらなあかん」と前を向けた。

2010年に念願の作業療法士に合格し、保健センターに就職。あるとき、災害時のリハビリテーションに関する勉強会に参加すると、自分の足を手術してくれた冨岡正雄医師（56）が講師で来ていた。「リハビリで助けられる命がある」。命の恩人から避難所などでの活動を聞き、災害関連死を防ぐリハビリの重要性に思いを深めた。

18年6月に起きた大阪府北部地震では発生直後に同府高槻市の避難所に駆けつけた。「こまめに運動をしましょう」。畳の上に横になって動きたがらない高齢者らに、声をかけて回った。入院中に看護師に励まされた経験を思い出し、笑顔で接することを心がけた。「ありがとうね」。暗かった人々に笑顔が戻ると、自らも気持ちが和らいだ。

事故現場では中野さんを含め562人が負傷し、運転士と乗客106人が命を落とした。あの日から14年。現場は大きく姿を変え、昨年9月に整備された「祈りの杜」で初めて営まれた追悼慰霊式には家族と訪問。この日を迎える気持ちは毎年、変わらないが、事故が風化していくことへの危機感もある。これ以上事故で苦しむ人が生まれないよう、事故の悲惨さ、安全の尊さを伝え続けることが大切だと感じる。

「亡くなった人の分まで懸命に生きたい」「JR西が安全な鉄道になるまで見守り続けたい」。「被害者」から「支援者」に回った自分の姿を、手を合わせて報告するつもりでいる。